

2023年3月期第1四半期決算電話会議説明および議事録

参考資料:2023年3月期第1四半期決算説明資料

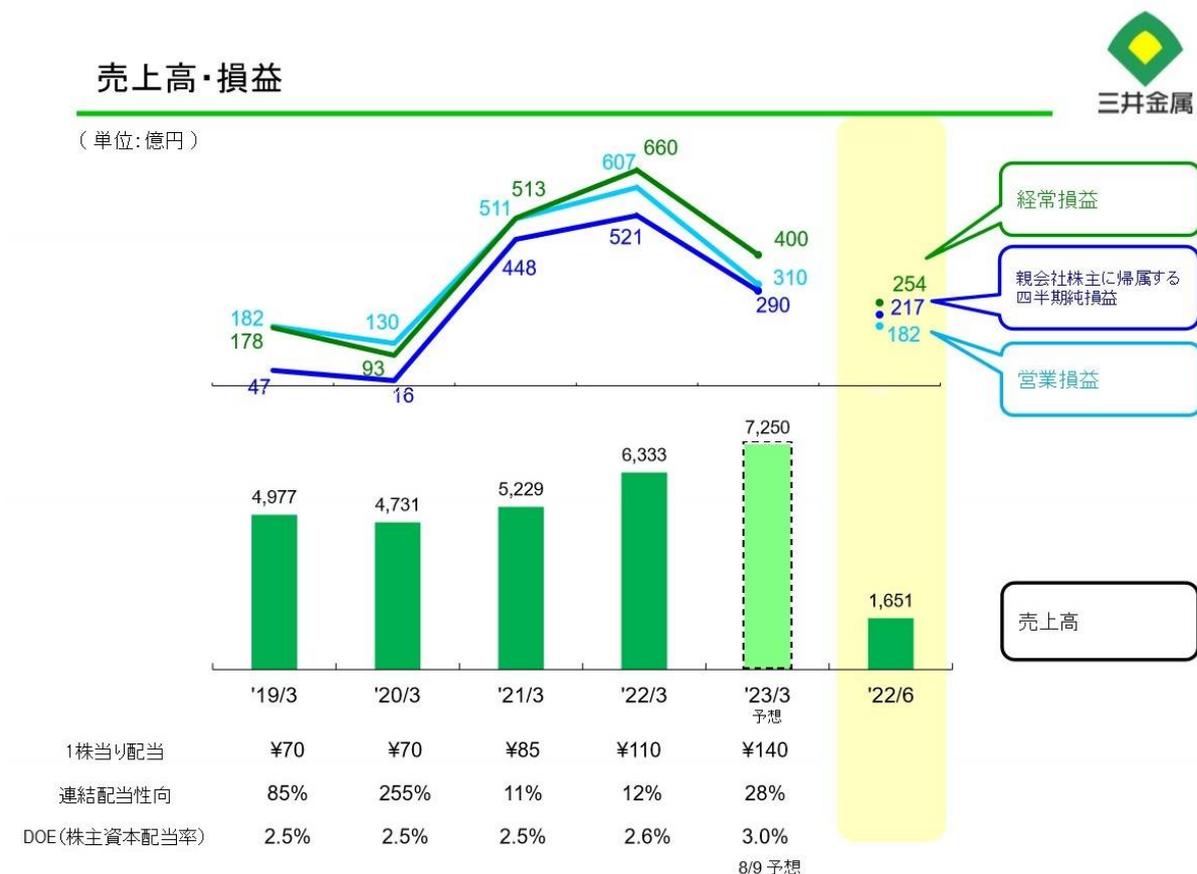
[https://www.mitsui-](https://www.mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=1dUk3GqLdWA%3d&tabid=199&mid=826&TabModule950=0)

[kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=1dUk3GqLdWA%3d&tabid=199&mid=826&TabModule950=0](https://www.mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=1dUk3GqLdWA%3d&tabid=199&mid=826&TabModule950=0)

(補足) PKG : パッケージ基板

HDI : マザーボード (High Density Interconnect)

■ご説明



2

決算説明資料2ページ「売上高・損益」をご覧ください。

・当社の2023年3月期第1四半期決算は、売上高は1,651億円、営業利益は182億円、経常利益は254億円、親会社株主に帰属する四半期純利益は217億円となりました。

・なお、2023年3月期の連結業績予想は、売上高7,250億円、営業利益310億円、経常利益400億円、親会社株主に帰属する純利益290億円と見込んでおります。

・前提となります金属価格や為替は決算説明資料17ページをご参照ください。

22年度経常利益見込



22年度経常利益は上期、通期ともに前回予想と同額を見込む

(単位:億円)



3

決算説明資料3ページの「22年度経常利益見込」をご覧ください。

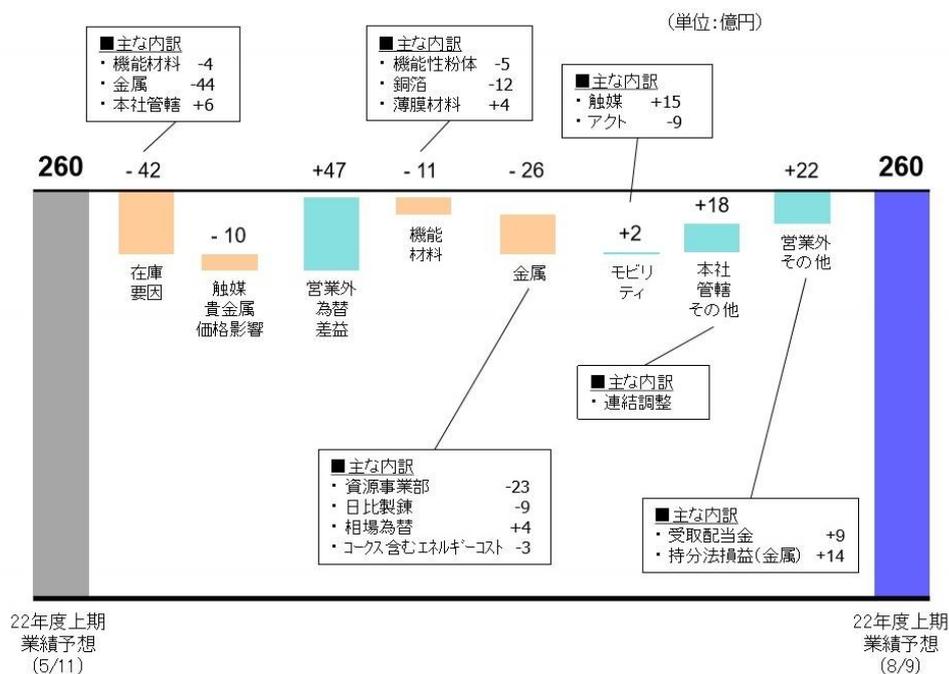
・足許の動向を踏まえて、上期および通期の業績予想を見直しましたが、経常利益の水準としましては、上期、通期ともに、5月11日に開示した予想からの修正はないと見込んでいます。詳細につきましては次のページ以降でご説明いたします。

・また、上期の経常利益予想である260億円に対して、第1四半期ですでに254億円を計上していますので、第2四半期につきましては差し引き6億円と予想しており、第1四半期に比べて248億円の大幅な減益を見込んでおります。この内容につきましても次ページ以降でご説明いたします。

22年度上期経常利益見込



22年度上期経常利益は前回業績予想と同額の260億円を見込む



まず上期業績予想の内容についてご説明いたします。決算説明資料4ページをご覧ください。

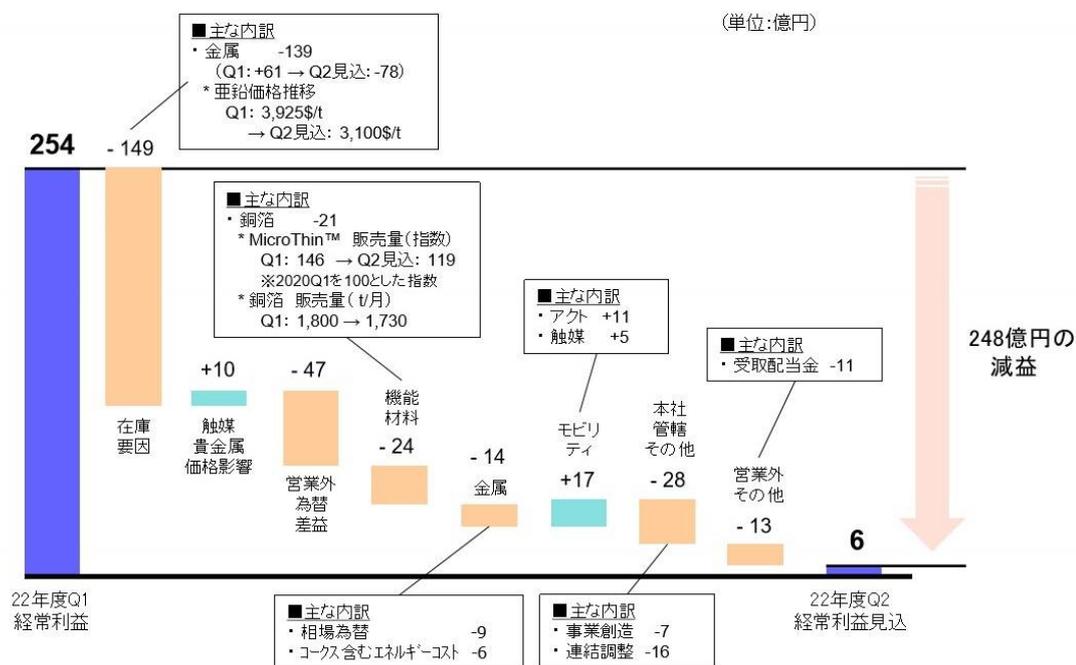
・5月の予想からの変更点として、まずマイナスサイドですが、金属価格の下落による在庫要因で42億円の減益を見込んでいます。また、ワンサラ鉱山の操業度が計画に届いていないことや金属価格下落の影響により、資源事業部で23億円の減益を見込んでいることなどにより、金属セグメントで26億円の計画比減益と見込んでいます。機能材料セグメントにおいては、主にスマートホン向けの販売が低調なことから銅箔事業で12億円の減益を見込んでいます。

・一方、プラスサイドですが円安が進んだことによる決済差益や外貨建て評価により営業外損益で47億円の好転要因となっています。さらに、その他の営業外損益でも、持分法損益において、硫酸価格上昇や円安による影響等により14億円のプラス、受取配当金が計画より9億円プラスとなる影響などがあり、結果的にマイナスサイドを打ち消すかたちで、5月の業績予想並みの260億円を見込んでいます。

22年度第2四半期経常利益見込



22年度第2四半期経常利益は対前四半期比で248億円の減益を見込む



5

次に第2四半期にかけて大きく減益を見込んでいる理由についてご説明いたします。決算説明資料5ページをご覧ください。

・248億円の減益のうち、149億円は在庫要因による影響で、ほとんどは金属セグメントにおける影響です。亜鉛価格が上昇した影響により第1四半期に金属セグメントで61億円のプラス影響がありました。一方、第2四半期に入り亜鉛価格が大幅に下落しており、17ページに記載の通り、7月から9月の亜鉛価格前提を第1四半期実績より825\$/t低い、3,100\$/tとしております。これによる在庫要因が、逆にマイナスの78億円になると見込んでおり、金属セグメントだけで合わせて139億円の減益要因となっています。

・また、前のページでご説明いたしました、営業外損益における為替差益の47億円ですが、これはすべて第1四半期に計上されており、第2四半期の為替水準は6月末と同レベルで見ていることから第2四半期には発生しないと見込んでいます。このため、この47億円も第2四半期にかけての大きな減益要因となっています。

・機能材料セグメントにおいては24億円の減益を見込んでいますが、特に影響が大きいのが銅箔における第2四半期の販売減速です。MicroThin™の販売量が第2四半期にかけて約20%下落すると見込んでおり、特にスマートホン向けの減速によりPKG向けの販売数量が落ちると見込んでいます。また、フレキ向け等についても同様の理由から減販を見込んでおり、銅箔全体では21億円の減益となると見込んでいます。

・金属セグメントにおいては、亜鉛価格の下落により13億円のマイナス、為替の影響でプラスの4億円、またエネルギーコストの上昇も見込んでおり、これらを合わせ、14億円の減益となる見込みです。その他、受取配当金も第1四半期のみ要因ということもあわせると、上期の利益のほとんどを第1四半期に計上するかたちとなります。

事業セグメント別内訳

(単位: 億円)	第1四半期			上期			通期		
	2022 実績	2021 実績	増減 (22-21)	2022 今回予想	2021 実績	増減 (22-21)	2022 今回予想	2021 実績	増減 (22-21)
■売上高									
機能材料	366	335	31 9.2%	700	692	8 1.1%	1,460	1,361	99 7.3%
金属	637	545	92 16.8%	1,430	1,135	295 26.0%	2,750	2,409	341 14.1%
モビリティ	498	507	-8 -1.7%	1,260	1,047	213 20.3%	2,570	2,071	499 24.1%
本社管轄	302	237	65 27.5%	550	517	33 6.4%	1,170	1,187	-17 -1.4%
調整額	-153	-154	1	-340	-338	-2	-700	-695	-5
連結	1,651	1,470	180 12.3%	3,600	3,053	547 17.9%	7,250	6,333	917 14.5%
■経常利益									
機能材料	91	79	12 15.3%	140	152	-12 -7.7%	270	300	-30 -9.9%
金属	130	116	14 12.2%	90	179	-89 -49.7%	100	363	-263 -72.4%
モビリティ	22	46	-24 -53.2%	42	68	-26 -38.3%	75	24	51 207.9%
本社管轄	4	4	-1 -16.2%	0	14	-14 -100.0%	10	39	-29 -74.1%
事業創造	-15	-14	-1	-36	-28	-8	-82	-58	-24
調整額	23	-19	42	24	-9	33	27	-7	35
連結	254	212	42 19.8%	260	376	-116 -30.8%	400	660	-260 -39.4%

それでは第1四半期の業績についてご説明いたします。決算説明資料8ページの「事業セグメント別内訳」をご覧ください。

・第1四半期の売上高は、前年同期比約12%増加し、1,651億円となりました。金属価格の上昇により、金属セグメントで大きく増収となり、また同じく金属価格上昇や円安により商社機能を有する関係会社の売上高が増加した影響により、本社管轄部門で増収となりました。機能材料セグメントにおいては、MicroThin™の販売量が増加したこと等により、増収となりました。

・経常利益は、前年同期に対し、42億円増益の254億円となりました。第1四半期の経常利益をセグメント毎に見ていきますと、

・機能材料セグメントは、銅箔事業において、MicroThin™の販売量が前年同期比で約10%増加したことや、薄膜材料事業における販売構成好転や円安の影響などにより、当セグメントの経常利益は前年同期比約15%増益の91億円となりました。

・金属事業セグメントは、エネルギーコスト上昇に伴うコストアップの影響は大きかったものの、亜鉛のLME価格が上昇したことおよび円安により、当セグメントの経常利益は前年同期比14億円増益の130億円となりました。

・モビリティセグメントは、触媒事業において、二輪向け触媒が特にインドで増販となったものの、貴金属価格による影響が前年度のプラス29億円から今年度はマイナスの10億円と39億円の減益要因となったこと、また、三井金属アクトにおいて、半導体不足および中国のロックダウンの影響もあり、販売量が減少したことなどにより、経常利益は前年同期比24億円減益の22億円となりました。

・次の9ページに各セグメントの経常利益差異について、要因別に分析したマトリックスを掲載しておりますので、ご参照願います。

事業セグメント別内訳

(単位: 億円)

	第1四半期			上期			通期		
	2022 実績	2021 実績	増減 (22-21)	2022 今回予想	2021 実績	増減 (22-21)	2022 今回予想	2021 実績	増減 (22-21)
■売上高									
機能材料	366	335	31 9.2%	700	692	8 1.1%	1,460	1,361	99 7.3%
金属	637	545	92 16.8%	1,430	1,135	295 26.0%	2,750	2,409	341 14.1%
モビリティ	498	507	-8 -1.7%	1,260	1,047	213 20.3%	2,570	2,071	499 24.1%
本社管轄	302	237	65 27.5%	550	517	33 6.4%	1,170	1,187	-17 -1.4%
調整額	-153	-154	1	-340	-338	-2	-700	-695	-5
連結	1,651	1,470	180 12.3%	3,600	3,053	547 17.9%	7,250	6,333	917 14.5%
■経常利益									
機能材料	91	79	12 15.3%	140	152	-12 -7.7%	270	300	-30 -9.9%
金属	130	116	14 12.2%	90	179	-89 -49.7%	100	363	-263 -72.4%
モビリティ	22	46	-24 -53.2%	42	68	-26 -38.3%	75	24	51 207.9%
本社管轄	4	4	-1 -16.2%	0	14	-14 -100.0%	10	39	-29 -74.1%
事業創造	-15	-14	-1	-36	-28	-8	-82	-58	-24
調整額	23	-19	42	24	-9	33	27	-7	35
連結	254	212	42 19.8%	260	376	-116 -30.8%	400	660	-260 -39.4%

次に第2四半期累計期間の見通しではありますが、同じく決算説明資料8ページの中央の欄をご覧ください。

・第2四半期累計期間の売上高は、金属価格の上昇および円安、また、触媒の販売が好調に推移していること等により、前年同期比約18%増収の、3,600億円と見込んでおります。経常利益は、前年同期に対し、約31%、116億円減益の260億円を見込んでいます。

次に通期の見通しですが、一番右の欄をご覧ください。

・売上高は金属価格上昇や円安の影響等により、前年比14.5%増収の7,250億円としています。経常利益は、在庫要因による影響が158億円のマイナスとなることやエネルギーコスト上昇等から、前年比260億円減益の400億円を見込んでいます。

セグメントの業績(1) 機能材料

(単位: 億円)

	22/Q1 実績	21/Q1 実績	増減 (22-21)	上2022 今回予想	上2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 今回予想	FY2021 実績	増減 (22-21)
■売上高	366	335	31	700	692	8	1,460	1,361	99
■営業利益	80	80	-0	130	152	-22	260	294	-34
■経常利益	91	79	12	140	152	-12	270	300	-30
※実力損益	87	74	13	138	145	-7	268	280	-12

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

(機能材料製品)	(主な用途)
機能性粉体 (電池材料)	 <ul style="list-style-type: none"> ・ハイブリッド車向けニッケル水素電池 ・電気自動車向けリチウムイオン電池
機能性粉体 (機能粉)	 <ul style="list-style-type: none"> ・各種電子部品 ・ガラス研磨材
銅箔	 <ul style="list-style-type: none"> ・高密度半導体パッケージ材料 ・プリント配線基板
薄膜材料	 <ul style="list-style-type: none"> ・フラットパネルディスプレイ

経常利益の増減説明

['上2021→'上2022予想 -12]

機能粉	-10(減販、原料価格高騰他)
銅箔	-9(電解銅箔減販他)
電池材料	+5(増販他)

['FY2021→'FY2022予想 -30]

薄膜材料	-16(在庫要因他)
機能粉	-14(原料価格高騰他)
銅箔	-5(電力費等コスト増加他)
電池材料	+5(増販他)

続きまして、セグメント毎の状況についてご説明いたします。

まずは機能材料について決算説明資料14ページの「セグメントの業績(1)機能材料」をご覧ください。

・第2四半期累計期間の経常利益は140億円、対前年同期12億円の減益を見込んでいます。その主な要因ですが、右下の増減説明にあるとおり、銅粉の販売が減少していることなどから、機能粉で10億円の減益。また中華系スマホの不振の影響から電解銅箔の販売量が減少していること等から、銅箔事業で9億円の減益を予想しています。

・通期の経常利益は前年比30億円減益の270億円と予想しています。薄膜材料事業で在庫要因の差等により16億円の減益とみているほか、機能粉において原料価格が上昇していること等から14億円のマイナスを見込んでいることが主な要因です。

セグメントの業績(2) 金属

(単位: 億円)

	22/Q1 実績	21/Q1 実績	増減 (22-21)	上2022 今回予想	上2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 今回予想	FY2021 実績	増減 (22-21)
■売上高	637	545	92	1,430	1,135	295	2,750	2,409	341
■営業利益	107	109	-2	60	170	-110	55	342	-287
■経常利益	130	116	14	90	179	-89	100	363	-263
※実力損益	69	81	-12	107	132	-25	122	253	-131

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

経常利益増減分析

	上2021→ 上2022予想	FY2021→ FY2022予想
相場・為替	51	66
T/C条件(亜鉛)	5	14
たな卸資産在庫要因	-64	-132
持分法損益	14	11
コークス	-32	-40
受取配当金	1	1
その他※	-64	-183
合計	-89	-263

2022年度年間損益感応度(経常損益)

(単位: 億円)

		フルオープン	予約含む
亜鉛(LME)	±100\$/t	13.4	8.6
鉛(LME)	±100\$/t	4.0	4.0
為替	±1yen/\$	5.5	4.2

亜鉛TC条件

	FY2020	FY2021	FY2022予想
	299.75 \$/t	159 \$/t	230 \$/t

※その他の主な内訳

上2021→ 上2022予想	エネルギーコスト-35、資源事業部-7、PGMリサイクル-7、 亜鉛・鉛コスト増-14
FY2021→ FY2022予想	エネルギーコスト-93、日比製錬大定修-25、資源事業部-12、 PGMリサイクル-14、亜鉛・鉛コスト増-26

続きまして金属事業セグメントです。決算説明資料15ページの「セグメントの業績(2) 金属」をご覧ください。

・第2四半期累計期間の経常利益は90億円、対前年同期89億円の減益を見込んでいます。左下の増減説明にあるとおり、相場や為替による好転はあるものの、在庫要因の差により64億円の減益となることや、コークス価格上昇で32億円、エネルギーコストの上昇による影響が35億円と合わせて67億円の減益要因となることなどからセグメント全体では大きな減益を見込んでいます。

・通期の経常利益は前年度比263億円減益の100億円を見込んでいます。上期同様、相場・為替によるプラス要因はあるものの、在庫要因の影響が132億円のマイナスとなることや、コークス価格やエネルギーコストの上昇により133億円の悪化となることなどがその主な要因です。

セグメントの業績(3) モビリティ

(単位: 億円)

	22/Q1 実績	21/Q1 実績	増減 (22-21)	上2022 今回予想	上2021 実績	増減 (22-21)	FY2022 今回予想	FY2021 実績	増減 (22-21)
■売上高	498	507	-8	1,260	1,047	213	2,570	2,071	499
(内、三井金属アクト)	(188)	(198)	(-10)	(418)	(378)	(40)	(904)	(788)	(116)
■営業利益	-5	45	-50	17	68	-51	55	15	40
(内、三井金属アクト)	(-11)	(3)	(-15)	(-11)	(0)	(-11)	(-5)	(-3)	(-2)
■経常利益	22	46	-24	42	68	-26	75	24	51
(内、三井金属アクト)	(-5)	(8)	(-13)	(-5)	(6)	(-11)	(0)	(5)	(-5)
※実力損益	32	17	15	52	28	24	85	84	1

※実力損益：経常利益から触媒貴金属価格影響を除いたもの

経常利益の増減説明

['上2021→'上2022予想 -26]
 触媒 -17(貴金属価格影響他)
 アクト -11(鋼材・樹脂価格上昇他)
 ダイカスト +5(歩留改善他)

['FY2021→'FY2022予想 +51]
 触媒 +53(貴金属価格影響他)
 ダイカスト +11(歩留改善他)
 アクト -5(鋼材・樹脂価格上昇他)

(モビリティ事業本部)	(主な製品)
触媒	・二輪車・四輪車排ガス浄化用触媒
三井金属アクト	・自動車用ドアロック
三井金属ダイカスト	・ダイカスト製品
その他関係会社	・ダイカスト製品・粉末冶金製品 ・プラスチック製品

アクト増減分析

	上2021→ 上2022予想	FY2021→ FY2022予想
増減販	-1	9
コスト削減	0	3
その他※	-10	-17
合計	-11	-5

※その他の主な内訳
 上2021→ FY2021→
 上2022予想 FY2022予想
 鋼材・樹脂価格上昇 -8 -9
 輸送費上昇 -2 -3

16

続きましてモビリティセグメントです。決算説明資料16ページの「セグメントの業績(3)モビリティ」をご覧ください。

・第2四半期累計期間の経常損益は42億円、対前年同期26億円の減益となる見込みです。右下の増減説明にあるとおり、触媒事業においては、二輪向け、四輪向けともに販売量は増加しているものの、貴金属価格影響が前年度のプラス40億円からマイナスの10億円と50億円の減益要因となることなどから、同事業で17億円の減益を見込んでいます。また三井金属アクトにおいては、鋼材や樹脂価格上昇の影響等により11億円の減益を予想しています。

・通期の経常利益は前年比51億円増益の75億円を見込んでいます。触媒の貴金属影響が50億円好転すると見込んでいることが、主な要因です。

■質疑応答

【全体】

Q. 通期の見通しを含めて、実力損益がどのように動いているのか教えてください。

A. 経常利益の実力損益についてはP22に記載の通り。上下の比較では金属の減益が107億円から15億円と大きく、減益要因は下期の亜鉛相場を3,100\$/tと想定していることにより10億円強、銅製錬の大定修で25億円、エネルギーコストで約20億円、神岡の水力発電で約10億円等による。

Q. 各セグメントについて、前回予想から修正の要因を教えてください。

A. 通期の営業損益を前回予想の390億円から310億円と80億円減少しており、その要因について説明する。機能材料は270億円から260億円に10億円減益しており、主に銅箔と機能粉の減販による影響が大きい。金属は140億円から55億円とマイナス85億円を想定している。金属でエネルギーコストが24億円増えており、資源事業部の亜鉛鉱山で操業が想定より遅れている等により、

30億円近く減益となる。モビリティを含めて残りはそれほど大きな減益幅はない。

- Q. P20の実力損益の推移では、機能材料が4億円、モビリティが35億円それぞれ上方修正されており、合計で10億円の上方修正となる。その背景を教えてください。
- A. P20の実力損益は経常損益がベースになっている。機能材料は経常損益ベースでは円安による営業外の為替差益が加わるため、実力損益は前回予想からプラスとなる。モビリティは二輪向け触媒の増販に営業外の為替差益が加わるため、前回予想から増益となる。

【機能材料セグメント】

- Q. MicroThin™の販売量の指数がQ1:146、Q2:119、下期:142と推移するが、HDI向けとPKG向けについて、どのように想定しているのか教えてください。
- A. HDI向けは従来通り、Q1からQ2にかけてピークを迎える。前回説明したシェアが100%になりそうなことも含めて、通期見込みは前回通りの数量を想定している。お客様がほぼ北米系スマホメーカーのため、数量は堅調に推移している。
- PKG向けは、Q1がスマホ向け、非スマホ向け共に需要が旺盛だったが、Q2はスマホ向けの急激な在庫調整により数量が大きく減少すると見込んでいる。下期は、在庫調整が底打ちして数量が回復すると見込んでいること、非スマホ向けについて、サーバーのメモリ用途を中心に堅調に推移することに加えて用途の広がりもあり、下期から回復すると想定している。

Q. HDI向けで新規顧客拡大について進展はありましたか。

- A. 中華系スマホメーカー2社に採用された模様だが、ハイエンドの機種に限られるため数量的なインパクトはそれほど大きくない。

Q. PKG向けについて、下期に用途の広がりを想定されているが、具体的な内容と今後のポテンシャルを教えてください。

- A. 現時点では具体的な用途の広がりはまだ見えていないが、過去2年間で新規用途の広がりがあったことから、下期もそれを期待して織り込んでいる。スマホで使われている部材がそのまま他の家電に転用されることが分かっているため、今後も非スマホ向けの用途の広がりは見込めると考えている。

Q. 電解銅箔を下方修正された背景について、フレキ向けや通信インフラ向けなど詳細を教えてください。

- A. フレキ向けは21年度Q4から調整が始まっており、Q1、Q2も低水準の需要が続いている。要因は中華系スマホの不振が一番大きい。下期はもう少し回復すると想定しているが、先行き不透明感もある。通信インフラ向けは21年度Q4と同水準で推移している。21年度Q4から始まった在庫調整が早めに解消すると見込んでいたが、想定より長く続いており、下期には立ち上がると見込んでいる。その結果、電解銅箔の重量ベースの数字はQ1、Q2ともに低水準で推移している。

【金属セグメント】

Q. ワンサラ鉱山の操業度低下の背景と今後の見通しを教えてください。

- A. 昨年まではCOVID-19等の影響もあり、通常の7～8割の操業であったが、期初計画は4月から通常操業に戻る計画としていた。現在、労働力の確保に時間がかかっており、通常操業まで戻っていない。下期は通常操業に戻ると見込んでいる。

Q. 下期の金属の利益の想定がかなり低いが、大定修等の一過性のものを除くとどのくらいと考えればよいか。

- A. 金属の下期の経常利益を10億円で想定している。一過性の要因では銅製錬の大定修が約25億円あり、在庫要因もマイナス5億円あるため、これらを除くと約40億円と考えられる。

Q. 予約の状況について、次年度以降も含めて教えてください。

- A. 今年度は亜鉛が2,980\$/tで予約しており、約35%の予約率。為替は110.4円/\$で約25%予約。23年度は、亜鉛が2,900\$/tで約7%の予約率。為替は110.5円/\$で約15%予約。24年度についても予約しており、亜鉛が2,800\$/tで約7%、為替は110円/\$で約5%予約。
- Q. 足元の亜鉛価格が御社の想定価格3,100\$/tより高く推移しているが、足元の亜鉛市況が仮に今年度末まで続いた場合は、在庫要因等、損益にどのような影響があるのか教えて下さい。
- A. 亜鉛価格がQ1 3,900\$/tからQ2以降3,100\$/tと約800\$/t下落する場合、在庫要因でマイナス83億円見込まれるため、あくまで目安ではあるが、100\$/t改善すると在庫要因のマイナスが約10億円減る見込みとなり、その多くがQ2に出ると考えられる。加えて、亜鉛価格の感応度から100\$/tあたり8.6億円/年のマージン改善が期待できる。
- Q. 原油や石炭などについて価格の前提をどのように想定されているか。
- A. 原油価格は、ドバイ原油を前回1バレル100\$で想定していたが、今回はQ2以降を1バレル110\$と想定している。コークスの原料炭は、前回370\$/tで想定していたが、今回はQ2を350\$/t、下期を300\$/tで想定している。

以 上